知事対談

高杉　良×仁坂吉伸

作家　　和歌山県知事

高杉　良（たかすぎりょう）

1939年、東京生まれ。専門紙の記者、編集長を経て、1975年「虚構の城」で作家デビュー。インスタントラーメンの"マルちゃん"ブランドで有名な東洋水産を描いた「燃ゆるとき」をはじめ、「炎の経営者」、「辞令」、「金融腐蝕列島」など多数の著書がある。

東京オリンピック開催に貢献した和田勇氏の姿から和歌山の進むべき方向性を見る

熱き心を持って未来を切り開く

仁坂知事（以下仁坂）●高杉さんは専門紙の記者編集長を経て、1975年に「虚構の城」で作家デビューされました。以来、「小説 日本興業銀行」「炎の経営者」など綿密な取材に裏打ちされた多数の企業・経済小説を発表されています。はじめに高杉さんが作家になられたきっかけや、どのような視点から執筆を心がけていらっしゃるのかなどお聞かせください。

高杉良（以下高杉）●幼少期から本や新聞を読む事が好きでした。つまり活字に親しんでいたんですね。小学校5年生の頃には学校の図書室で中央公論とかも読んでいました。ですから当然文章を書くことも好きで、物心つく頃から童話作家になれたらいいなあと思っていたようです。また僕が書く小説の分野は、経済物とか企業物とかいわれていますが、それにはリアリティが一番求められます。しかし面白くなければ読んでもらえないので、「この先、どうなるんだろう。この主人公どうなっちゃうんだろう」というスリル感をもたせるようにしていますね。エンターテイメント性が問われるのは当然です。（笑）

幼少時に両親と生き別れた苦境を糧に、ロサンゼルスでスーパー経営に成功した日系2世のフレッド・和田勇。7年ぶりに訪日した1958年、親交が厚い日本水泳連盟会長の田畑政治から、オリンピックを東京に誘致したいとの相談を受けた。ラテンアメリカ諸国の票を集めるのが肝心要だと考えた和田は、翌年、中南米を歴訪し、票獲得に尽力する。祖国日本に、勇気と希望を与えたい―。戦後日本の隠れた英雄を描く実話小説。

東京にオリンピックを呼んだ男／著者：高杉良／角川文庫

戦後日本経済復活のきっかけとなったのは

仁坂●高杉さんにとって戦後の日本経済や企業の経営などについて一番印象に残られているものはなんでしょうか？

高杉●まず昭和20年の敗戦でしょうか。全てはそこから始まりますが、マイナスからスタートし、よくここまで復興したなあと思います。昭和30年代に社会的なインフラの基盤がしっかりできたからこそオリンピックの開催が可能だったのだと思います。そしてオイルショック。知事は元通産省だったそうですが、当時の通産省の対応は実に見事でした。

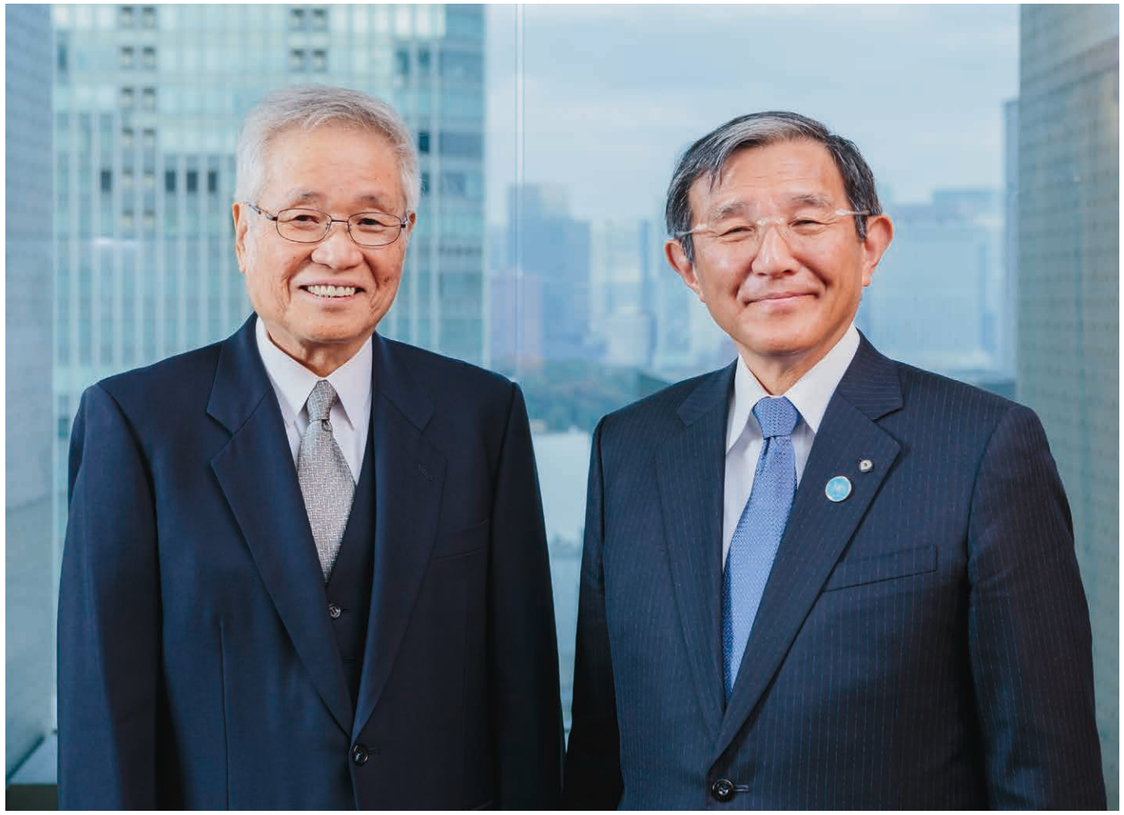
仁坂●私の入省は、オイルショックの後でしたが。戦争が終わってから約70年間、日本人は一生懸命努力し勤勉で誠実に働き、平和主義を貫きながら世界の発展途上国を援助するなど活躍してきました。それが現在の世界における日本の評価に繋がっているのかもしれません。ただ経済の成長には大きなきっかけも大切です。2020年には東京でオリンピックが再度開催されるということで、日本経済の機運は非常に高まっていますが、1964年の東京オリンピックも当時の経済成長には非常に大きなインパクトを与えました。高杉さんはこのオリンピック開催に貢献され、和歌山県とも大変縁のある和田勇さんを主人公とした"東京にオリンピックを呼んだ男"を出版されています。

1964年にアジア地域で初めて開催された東京オリンピック。東海道新幹線の開業や首都高速道路・名神高速道路の整備など、交通機関・道路等のインフラ整備に大きな影響を与え、戦後の日本復興に大きな役目を果たした。

高杉●きっかけは東洋水産の創業社長である森和夫さんでした。「和田さんは日本の恩人なのに日本では知られていません。フレッド和田勇さんのことを小説にしてください」と何度も声をかけてくれたんです。でも僕が書いているのは経済小説ですから少し違うなと思い、一年ぐらい断り続けていました。しかし森さんは「私も一緒にアメリカに行くので、ぜひ和田さんに会ってください」と言って僕を口説いたんですね（笑）。1987年にロサンゼルスに行きましたが、当時、すでに和田ご夫妻は高齢で、そんなご家庭に泊り込んで取材するなんて夢にも思っていませんでした。ところがお会いした瞬間にご夫妻の素晴らしさに感動しました。奥様の正子さんは毎日和食の用意をして下さり、10日間和田邸に泊めていただきました。正子さんは克明な日記を書いていました。そのお陰で、自信作ともいえる本になりました。

仁坂●そのような密着取材があったのであのような臨場感溢れる小説が生まれたのですね。勇さんも正子さんもご両親は和歌山出身で、お二人は日系2世です。和歌山で過ごされた時期もあったのですが、若くしてアメリカで成功を収めていました。しかし状況は一変し、日米が開戦してしまいます。

高杉●日系人は太平洋沿岸での居住が禁止され、収容所に入るか内陸部に移住するか選択を迫られました。そこで和田さんを含む130人は内陸部であるユタ州に移り、農園を開拓するのですがうまくいかず、仲間は散り散りになってしまったのです。その後和田さんはロサンゼルスで成功しますが、ユタ州の頃の仲間とは疎遠になりました。またユタ州での生活は大変だったようで、取材したいと言っても頑なに同行を断るんです。しかし取材で久方ぶりに再会した時、当時の和田さんが移住者たちのためにどれほど頑張ってくれたかと讃える言葉

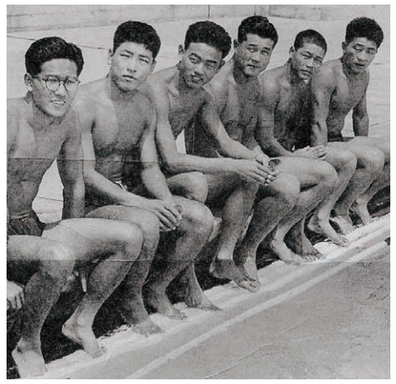


知事対談

高杉　良×仁坂吉伸

作家　　和歌山県知事

1949年に開催された全米水泳選手権大会に参加した代表選手６人の内、２人が和歌山出身だった。一番左が主将を務めた村山修一（むらやましゅういち）氏。左から二番目が古橋廣之進（ふるはしひろのしん）氏、そして橋爪四郎（はしづめしろう）氏。日本チームは、３日間で自由形の６種目中５種目に優勝、９つの驚異的な世界新記録を樹立し、団体対抗戦でも圧倒的な強さで優勝した。
（早稲田大学水泳部HPより）



を聞き、和田さんも涙ぐんでいました。まさかそんな風に思ってくれていたとは思いもしていなかったようです。

東京オリンピックを実現 和田勇の熱き心

仁坂●和田ご夫妻が東京オリンピック誘致活動をするきっかけともなった１９４９年の全米水泳選手権大会のエピソードをお教えください。

高杉●ロサンゼルスには羅府新報（らふしんぽう）という日本語版の新聞があるんですが、そこに日本の水泳選手６名を受け入れてくれる家庭がないかという記事が掲載されているのを正子さんが見つけ、「パパ、これどうかしら？」と和田さんに相談し、コーチを含め８名全員の面倒を見ることとなりました。当時は終戦直後で、まだまだ反日感情も残っていました。そこで選手たちの安全面や精神状態を考慮し、ホテルではなく小さな子供がいる日系人の家庭を探していたのです。

仁坂●そして部屋だけでなく食事も全て面倒を見られたそうですね。食事は本当に豪華で素晴らしく、選手たちは大満足し、大会ではいくつもの世界新記録を樹立したそうですね。

高杉●特に古橋さんや橋爪さんたちは千五百メートルの予選で、２位を２００メートル以上も引き離す世界新記録でした。それまで日系人を蔑んでいた白人の市民たちが選手を取り囲み、〝グレートスイマー〟とか〝フライング・フィッシュ・オブ・フジヤマ（フジヤマのトビウオ）〟と称賛し、一夜にして〝ジャップ〟という蔑称から〝ジャパニーズ〟へと日系人への呼び方が変わったそうです。面倒を見ていた和田さんは、逆に彼らの大記録と活躍に非常に感謝されていました。

仁坂●ちなみに橋爪さんだけでなく選手団の主将を務めた村山さんも、和歌山ご出身です。

高杉●和田ご夫妻はお腹が減って眠れないという橋爪さんに郷土の味である〝茶粥〟を夜食にご馳走し非常に喜ばれたそうです。

仁坂●日本から遠く離れ、初めての海外であるロサンゼルスで食べる郷土の味。美味しかったでしょうね。また１９６４年のオリンピックが東京で開催されたのもご夫妻の活躍があったからこそだと伺っています。

高杉●そうです。和田ご夫妻の活躍がなければ開催できなかったと思います。当時の日本政府は外貨不足で、オリンピック誘致において〝鍵〟を握っていた中南米の票の取りまとめは、和田さんの自費、全くのボランティアで行われました。まず最初にメキシコに行き東京開催への賛成を取り付け、さらには中南米諸国の関係者への紹介状を書いてもらいます。和田さんがスペイン語もできたのが幸いしましたが、苦労しながらもビジネスで成功を収めた人物です。そのような交渉力は非常に高かったのでしょう。

仁坂●飛行機に乗っている最中にプロペラが一基止まり、二人で死を覚悟したこともあったとか。

高杉●アンデス山脈を越えようとしていた時ですね。とにかく中南米での交渉は大変な二ヶ月だったようですが、祖国のために自費を投じて活動している和田ご夫妻に対し、多くの国が好意的に受け取ってくれたようです。

仁坂●そしてアジアで初めてのオリンピックが東京で開催されました。

これからの日本、和歌山の方向性を見る

仁坂●ロサンゼルスでの日本選手の活躍や東京オリンピックの開催などのイベントは、日本が経済的にも立ち直る大きな原動力になったと思います。そして今、世界的に激動の時代といわれていますが、今後日本経済がますます発展するためには何が必要だと思いますか？

高杉●日本人は海外でも一目置かれる存在です。それは今までの日本人が貫いてきた倫理観によるものが大きいと思います。それを守りながら、人口減少や高齢化の問題を国民が共有し、外国人労働者を受け入れるなどの対策は必要だと思います。内需を前提とする経済成長は難しいと思いますが、国民ひとりひとりの安定した生活を維持向上させていくことを考えるべきだと思います。そういう意味では和歌山県が策定した〝長期総合計画〟は非常にわかりやすくよくできていると思います。特に〝世界とつながる　愛着ある元気な和歌山〟という将来像は本当に素晴らしい。

仁坂●現在のような豊かな時代でも、和田さんのような熱き心は非常に大切です。しかし昔のように〝ハングリー精神〟で突き進むというのは難しいかもしれません。そのために方法論や将来像が必要です。高齢化や少子化に伴う人口減少に対応するために子育て支援や産業政策、そして医療や教育、地域づくりにインフラの整備など全てが影響し合いつつ進む、その方向性などを具体的に描いているのがこの長期総合計画です。本日はお忙しい中、ありがとうございました。

フレッド・イサム・ワダ／和田 勇。1907年ワシントン州生まれの日系二世。勲三等瑞宝章、和歌山県スポーツ栄誉賞、和歌山県国際文化功労賞、御坊市名誉市民。
下は御坊市役所前に建てられた和田氏の功績を称えたレリーフ。

和歌山県長期総合計画

和歌山県の時代の流れにあった10年後の未来を展望した「めざす将来像」と、その実現に向けて取り組む施策の基本的な方向を定めた計画。
（計画期間：2017年度～2026年度）

詳しくは
http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/020100/chokei/chokei.html